



西日本新聞 文化欄

1988年九月二十六日～十月八日

所詮一人 孤独の身で突っ走る

一本釣りに反発

中央に注目される画家で、文筆活動もする菊畠茂久馬は九州派の話になると表情や口調が複雑に変化する。

心優しい人々の集まりだった。激しいけんかとは裏腹に、金がない人の会費を立て替えた桜井孝身(フランス)や作品を買って援助する大山右一(福岡市)らもいた。「友のことを自分の事として受け止め合う集団は、天涯孤独だった僕には桃源郷だった」。この中で奔放にふるまつた。「崩壊寸前の僕を救ってくれた」と懐かしむ。

だが、この世で桃源郷が長く続くわけがない。運動を重視して、芸術に不可欠な個人の創造性を抑え込む先輩と衝突を繰り返す。

「集団だ」「東京攻略だ」。と口にしても、評論家がくれば、とかく自分が目立ちたがるのが人情。だれかが目立てば人間関係もぎくしゃくとしてくる。

菊畠は、東京の画廊の”一本釣り”に掛かった。現代美術で最も力があった南画廊と契約したのだ。これが仲間の反発を買い、結局、九州派から離れる。「無残な青春でもあった」と言う。以来、孤に閉じこもることになる。

大当たり「奴隸系図」

三十六年の現代美術の実験(東京国立美術館)で、丸太に五円玉をびっしり打ちつけて床にも硬貨をばらまいた作品「奴隸系図」で美術界をあ然とさせた菊畠は、翌三十七年には南

画廊での初個展で円形の「奴隸系図」を発表。入れ歯や義眼を埋め込んだ気味悪い作品を十点ほども買ったコレクターもいて大当たりだった。

三十九年の第二回展は「ルーレット」シリーズ。原色のペンキが旭日のように放射状に広がるルーレットは、日本のポップアートの典型とまで評された。が得意を極めていながら、なぜか、その後十九年間も絵画の個展はしていないのだ。

万博を前にした経済成長期にあった。「陽気で射幸心をあおるルーレットが時代に合致したに過ぎないと感じた。僕本来の絵ではない、と思った」。しらじらしくなって新たな展開はできなかつた。そして「自分自身の仕事」を探るためにアトリエに閉じこもり、画廊とも疎遠になつていった。

作兵衛翁に心服して

四十五年には東京の美学校講師になる。大学紛争の中で、理想の大学を目指した出版社社長が造った学校である。ここで、筑豊の炭坑絵師と呼ばれた山本作兵衛(五十九年、九十二歳で没)が描いた記録画を生徒に模写させて高さ三メートルが、横二十メートルの大壁画を完成させた。

作兵衛は、六十代半ばから突如として、記憶を頼りに絵を描き始めた元坑夫だった。発表などは考えもせずに、たどたどしい筆で千枚以上も描いた作兵衛に菊畑は心服した。熱氣にはやり、人気に浮かれた時代への反省もあつたろうか。作兵衛の、コツコツと自分を追いかける姿勢に、生まれて初めて自分の絵の師だと感じた。

一方で、戦争直を主題にした「フジタよ眠れ」(四十七年)「天皇の美術」(同)を出版、その延長にある「戦後美術の原質」(五十七年)を出す。日本の近代美術の構造をとらえ直し、その中の面家としての自己を位置づけようとしたのだろう。

平面だけで勝負

その間、デッサンを無数に描き、オブジェを百個以上作り続けた。見せるためではなく「自分の本体は何だ」と問うためだったという。

やがて、カンバスに棒や布を埋め込み、油彩と蜜蠟(みつろう)を混ぜた濃いグレーを何度も重ねた「天動説」シリーズが生まれる。平面とオブジェの合体だった。五十八年に銀座の東京画廊で発表。十九年ぶりの個展、大成功で「完全な死から、生まれ変わった」。孤独の身で走ってきたのが認められ、次の仕事への意欲がわきあがってきた。

やがて「天動説」のシリーズから、埋め込んでいた物体が消え、絵の具と蜜蠟だけの画面になる。九州派時代に「反絵画」を叫んで平面を拒否して以来、オブジェにこだわってきたが、平面だけで勝負する自信ができた。さらに濃いグレーも消え、水色がかった「月光」、未発表の「月宮」のシリーズへと変容している。

「もう五十代半ば、円熟せなならん。所詮(しょせん)は一人。孤独の中で突っ走る。コケたときは、バタバタせずに消えてみせる」と思う。

北九州市立美術館が十一月十五日から「菊畠茂久馬展」を開く。未発表のオブジェも含めた回顧展。開催中の九州派展を「孤の自分には何の感興もわからない」と言い切る男の、心の軌跡がそこで見られるかもしれない。